

課題名 朝鮮通信使がみた江戸時代の建築

指導教員 中西 章

### 1. 研究の目的

鎖国中の江戸時代において、日本の中を見聞することができた唯一の外国人は朝鮮からの朝鮮通信使である。そこで海外の人から江戸時代の建築がどのように評価されていたのかを明らかにすることを目的として、朝鮮通信使による江戸時代の日本建築に対する評価について検討する。

### 2. 研究の方法

『海遊録』（1719）・『日東壮遊歌』（1763）という2回の朝鮮通信使が残した記録をもとに、日本の建築に関する記述を抜き出しどのような点に着目し評価しているのかを検討する。また、これによって日本の江戸時代の建築における技術等が海外の人の視点からどう評価されていたのかを分析し、評価していく。

### 3. 日本建築に対する着目点

まず、朝鮮通信使が日本に来たときにどのような建築に言及していたのかを文献から抜き出した。これによって彼らがどのような点に興味を持っていたのかを明らかにしていく。その結果、眺め・寺・町並み・城・富豪の家・技術という5つのポイントに分類することができた。分類した結果は

	海遊録	日東壮遊歌
眺め	38	44
寺	13	16
町並み	11	20
城・富豪の家	27	6
技術	22	20

右の表の通りである。これを見ると、通信使は文人であった為、眺め・景色に多く興味を持っていた事が分かる。また、『日東壮遊歌』では町並みに、『海遊録』では城・富豪の家について多く着目しており、両方にいえることは技術について多くの関心が向けられている事がわかった。そこで、次にこの中で技術についてより掘り下げて調べることにした。

### 4. 日本の技術についての評価

両通信使とも日本の技術に高い評価をしていることがわかった。ここで、これらの高い評価は外交辞令的なものではないかという疑問が出てくるが、これについては文中で日本人に対して自分たちより下だと見下している内容が多々みられるため、これらの評価は通信使たちの本当の評価と思われる。次に、技術について述べられている中で尺度・屋根・障子・暖房について多くふれられていたためこれらについて検討してみる。

技術についてまとめている際に両通信使が共通して日本の技術に対して「精巧で緻密」だという言葉をもとに述べているのを見受けられた。日本では尺貫法という単位が国中で統一的に用いられ、建築における規格化も行われていた。「一国内の規格はみな同じ」と

いう記述からも日本では統一された尺度の単位を用いていたことが分かる。また建築では規格があり、さらにこの尺度の通りに正確に杉や桧といった材木を加工する職人の腕もあっての規格の正確さなのだろう。朝鮮では、国内での度量衡の統一が十分に行われていなかったため日本の尺度の精巧さに感心し、驚いたのだと思われる。

次に、屋根についてだが、江戸時代の日本では都市部の住居には瓦を用いており、それ以外はこけら葺きや、桧皮葺き・茅葺きが用いられていた。一方朝鮮では、瓦が庶民住宅まで普及しておらず全ての建物が瓦葺きである江戸などの都市をみて感心していた。江戸時代に瓦が急速に普及した理由として火事の多かった江戸の火事の被害を押しやるため西村半兵衛という人が軽くて簡単に作れる棧瓦という瓦を発明し、普及したことがあげられる。また、瓦葺き以外では日本の茅葺きが40年は耐えるという話に感心していた。また、日本の「茅葺き屋根の見た目が盆を伏せたよう」と述べられていたが、これは日本が茅の細い先端を屋根の頂点へ向けて葺き、油分の多い穂先を雨にさらさせることによって耐久性を増しているのに対して、朝鮮では簡単に葺ける穂先を下にした葺き方を採用していたことから、見た目の違いに違和感を覚えたのだと思われる。

次に、文献中に日本の障子は「推転開閉に枢環の制」がないと述べられていることに興味を持ち調べてみた。調べたところ、「推転開閉に枢環の制」というのは2枚の障子を両サイドに畳み、それを上に押し上げるという朝鮮での障子の開き方の種類だということが分かった。これは日本との技術の文化の違いだと思われる。

最後に、両国の暖房についてだが、日本では室町時代から掘りごたつを用いている。これは囲炉裏の上に簡単な格子をつけてその中に炭火を入れ布団などを掛けてその上に足などを乗せ暖をとるというものである。江戸時代には、この掘りごたつを改良して大人数で入れるものも作られており、文献中では何人かで一緒に暖をとっている描写があるため、これを用いている可能性が高い。一方朝鮮では、オンドルという台所のかまどから出た煙を床下へ送って暖める床暖房のようなものを用いており、オンドルのない日本の冬場は寒いという事を述べていた。

## 5. 考察・まとめ

以上より、日本の江戸時代における建築技術は朝鮮とは異なる点もあるが尺度や瓦の量産など優れている点も多くある事が分かった。ただ、暖房面では朝鮮の方が暖かく優れておりまだ改善する点も多々ありそうだった。島国という閉鎖された土地の中、江戸時代の大工や職人たちは互いに連携を取り合っ海外にも負けない建築技術を確立している事が理解できたので、このすばらしい過去の先人たちの作り上げた建築技術を引き継いでよりよい建築技術の研究をしていきたい。

## 6. 参考文献

原著：金仁謙、翻訳：高島淑郎『日東壯遊歌』（東洋文庫）平凡社、1999年

原著：申維翰、翻訳：姜在彦『海遊録』（東洋文庫）平凡社、1974年